



「諏訪神社」での獅子舞を見る渋沢栄一翁[渋沢史料館所蔵]

血洗島の諏訪神社の獅子舞

※「屋台ばやしとししまい」関係

渋沢栄一は、二十四歳で血洗島を離れても、ふるさとへの思いを忘れることはありませんでした。中でも、秋祭りの獅子舞を見るのが大好きでした。年の初めには、必ず秋祭りの日を確認し、予定を空けておくように指示していたそうです。栄一は、「夜おそくまで熱中して獅子舞を楽しむことができます。結局のところ少年時代の心に帰るからなのでしょう。」と話しています。また、泳いだことや相撲を取ったことなどを思い起こし、「さいなことまで興味がつきません。」とも話しています。血洗島は、いつの日も栄一の心のふるさとだったのでしょう。



「わたしたちの深谷」 深谷市教育委員会より

※「屋台ばやしとししまい」 関係
小前田の諏訪神社の祭屋台

小前田上町・中町・本町には、明治のはじめころに建てられた三台の屋台が保存されています。諏訪神社の祭りでは笛、鐘、太鼓の屋台ばやしにぎやかです。祭りの時、昼間は、国道一四〇号線で屋台がひきまわされ、夜は屋台を舞台にして歌舞伎が上演されました。たくさんのお店が出て、多くの人が、この祭りに来て、楽しんだということです。屋台は、どれも櫓、杉、檜、銀杏の木が使われ、豪華なつくりになっています。

現在も祭りの時には、国道一四〇号線でひきまわしがされています。祭りではない時は、「道の駅はなぞの」で展示されています。



渋沢栄一の国際交流

※「はじめてのコーヒー」関係

フランス到着数カ月後の栄一　　フランス到着直後の栄一

[渋沢史料館所蔵]

渋沢栄一が初めて外国にわたったのは、日本が「武士の時代」だった慶応三（一八六七）年です。

ヨーロッパに向かう船「アルフエ号」の中で、日本の文化とは違う文化に触れることができました。中でも「食事」は日本とは大きく異なりました。当時の日本の食事は、食器を入れている箱をテーブルの代わりにし、白米とみそ汁、漬物を食べていました。そんな生活の中で見た豊富な食材を使うヨーロッパの料理は、栄一に強い衝撃を与えたはずです。

一年余りのヨーロッパの生活で、栄一は進んだ技術や文化に驚き「日本は外国のよいところをもっと取り入れなくてはならない」と考えるようになったのです。



渋沢栄一記念館を見学する
ギューリック三世夫妻
(令和元年5月27日)



青い目の人形を手にする渋沢栄一

[渋沢史料館所蔵]

※「友情の人形」関係
渋沢栄一とアメリカから来た「青い目の人形」

今から九十年以上も前、日本とアメリカの関係が悪くなったことがありました。そこで、以前日本に住んでいたギューリック氏は、アメリカと日本の関係を心配し、子ども頃からお互いの国を知ることが将来につながると考え、日本の子どもたちに一万二千体の青い目の人形をおくりました。

日本では、渋沢栄一が人形の受け入れを進め、お礼として日本人形五十八体をアメリカにおくりました。埼玉県では、現在十二体の人形が確認されています。

令和元年五月、ギューリック氏の孫であるギューリック三世が自ら八基小におくった人形に会いに来ました。日本とアメリカの親交は今もなお続いているのです。



やつもと ちく あかぎやま
八基地区から赤城山をのぞむ

※ 父母のすがた
「父の教え」
関係

渋沢栄一は、渋沢家の長男として、父
母から大切に育てられました。

母（えい）は、栄一をとててもかわいが
りました。北風が吹く寒い時には、栄一
に風邪をひかせないように、羽織を持っ
て遊び場所をさがしまわりました。栄一
がそれをいやがって、羽織を地べたに放
り投げて走り出しても、母は栄一を追
かけたと言われています。

また、母は近所に住む病人に対して着
物や食事の世話をするなど、優しい心を
もち思いやりのある女性でした。後に、
恵まれない人々のための施設をつくろう
としていた栄一には、この母の姿がいつ
も心にあったにちがいありません。

『しる』

せんせい　うち　ひと　よ
先生やお家の人と読んでみましょう。



栄一が通った尾高家の部屋 [渋沢史料館所蔵]

父（市郎右衛門）は、俳諧や読書に親しみ、書にも秀でていました。「まじめな性格で、行動がきちんとしていた」と栄一は思い返しています。

栄一は、五歳の頃から読み書きについて父に学び、七歳になると、従兄弟の尾高惇忠から学問を学ぶことになります。すると栄一は中国や日本の興味ある本を次から次へと読んでいきました。十二歳の正月、年始回りのとき、読書に夢中になりすぎて溝に落ち、晴着を汚してしまった、というエピソードもあります。そんな栄一に、父は、「文学に興味をもつのはよいが、仕事に関心を薄くしては困る。」と注意をしていたそうです。



※「藍より青く」関係
 渋沢栄一の家の仕事

渋沢栄一誕生地「中の家」(明治時代に建てられたもの)

渋沢栄一の家(「中の家」)は、農業をしながら、藍葉を買い入れ、藍玉を作り、紺屋(布や糸を染める店)に売る仕事もしていました。紺屋に喜ばれる藍玉を作るためには、質のよい藍葉を買い入れなければなりません。栄一の父は、藍葉の善し悪しを見抜く技術をもっていました。「肥料が足りない」、「水が足りない」、「刈り時が悪い」、「手入れが行き届いていない」などと言いついて当てるので、藍を育てる農家からも信頼されていたそうです。十四歳の頃から、栄一は父と一緒に藍葉の買い出しを始めますが、しだいに一人で出かけるようになりました。父の仕事を見よう見まねで覚え、自らも研究して藍葉の質まで見ぬけるようになりました。

青は藍より出でて藍より青し

染料の青色は、藍から作られますが、その見事な色は、もとの藍をしのぐほどになります。このことから、「弟子が先生をしのぐ力をもつ」ということのとえに使います。



あいだま　あい　は　かんそう
藍玉と藍葉(乾燥)

[渋沢栄一記念館所蔵]

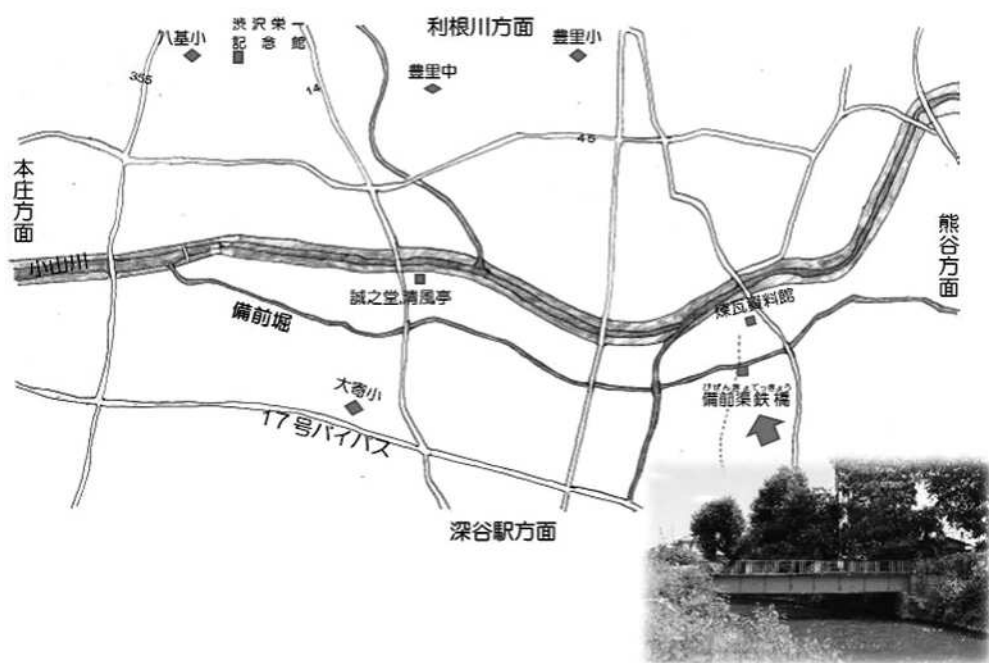
栄一は二十歳頃になると藍玉の販売のため紺屋まわりに出かけていきます。栄一が売りに出かけた紺屋は、信州（長野県）に六、七十軒、秩父に二十軒ほど、その他伊勢崎（群馬県伊勢崎市）などにも大きな取引先があつたそうです。

少年・青年時代に藍葉を買い入れ、藍玉を作り、売り歩いた経験が、後に実業人として活躍する栄一の原点だったのかもしれません。

ところで、当時の藍玉の販売は、なかなかの儲けがあつたと言われていますが、栄一の父は、栄誉やお金を得るためだけではなく、仕事そのものを生きがいにしていたと言われています。

『しる』

せんせい うち ひと よ
先生やお家の人と読んでみましょう。

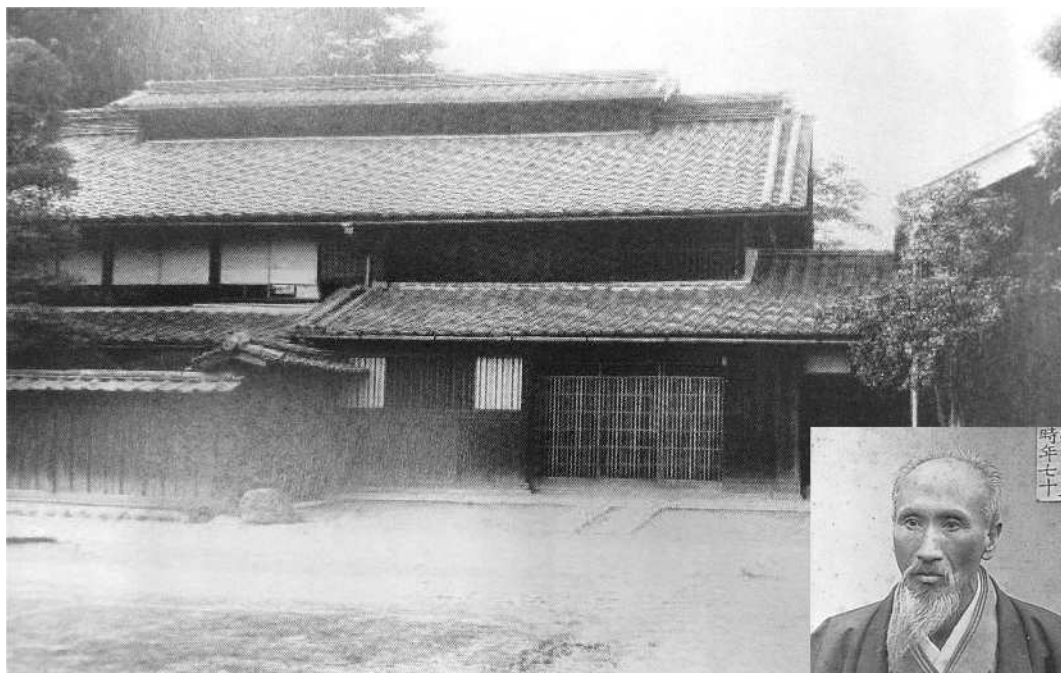


〔備前渠鉄橋〕

※「備前堀」関係
備前堀と尾高惇忠

備前堀とは、今から四百年以上前、江戸時代に掘られた農業用水路です。仁手（本庄市）で利根川から取り入れられた水は、本庄市・深谷市・熊谷市を通過して福川に合流します。備前堀のおかげで、その周辺の田に水が入り、稲を育てることができるようになりました。

一八六九（明治二）年に、備前堀の水の取り入れ口の変更をめぐって、大変な騒ぎが起きました。仁手（本庄市）の取り入れ口をとじて、新たに、中瀬（深谷市）から利根川の水を引き入れる工事を始める（県の計画）、というのです。水路が変更されると、水が行き渡らなくなる農家もあり、村同士の争いになってしまいう心配がありました。



尾高惇忠の生家

尾高惇忠

[渋沢栄一記念館所蔵]

この県の計画を知った地元の人々は、あまりにも一方的な話に驚きを隠せませんでした。そこで、事が重大であるため、今後の対応について、尾高惇忠に意見を求めることにしました。その頃東京で暮らしていた惇忠は、郷里の一大事とばかりに地元に戻りました。そして、地元の人々の意見をとりまとめ、代表として国に事情を説明し、この計画を中止させることができました。惇忠は、国の役人の前にして、取り入れ口の変更による影響や農民の実態などを分かりやすく説明したそうです。惇忠のこうした優れた能力や人柄が認められ、その後、国の役人として富岡製糸場の建設に関わることになります。

※「働く 深谷と「レンガ」のつながり
 深谷と「レンガ」のつながり
 関係



レンガづくりの富岡製糸場
 (1872(明治5)年完成)



現在の深谷駅
 (1996(平成8)年竣工)

現在の深谷駅は、レンガづくりで有名な東京駅に似せて、一九九六(平成八)年に建てられました。その理由は、大正時代に建てられた東京駅のレンガが、当時の深谷のレンガ工場で作られたものだったというつながりがあったからです。このような深谷とレンガのつながりは、およそ百五十年以上も前の明治時代から始まりました。

明治時代の初め、富岡製糸場建設の責任者である尾高惇忠は、荏塚直次郎にレンガの製造を頼みました。製糸場の設計者がレンガ文化国であるフランス人だったため、大量のレンガが必要となったからです。初めてのレンガづくりということもあって、失敗の連続でした。それでも、直次郎は、「かわら」職人の手をかり、



深谷に建てられたレンガ工場(1908[明治41]年頃)

[深谷市所蔵]

試作を何度も重ねながら、ついにレンガを完成させました。手作業で一つ一つのレンガをつくりあげた直次郎らの努力は大変なものだったにちがいありません。その後、日本では洋風の建物が増え、レンガがますます必要となりました。そこで、渋沢栄一は、日本初の機械式レンガ工場を深谷に設立する計画を立てました。直次郎は栄一の依頼を受け、工場の建設が地元の利益になることを伝え、村々との調整役となって活躍しました。レンガ工場の生産は二〇〇六(平成十八)年で終了しましたが、東京駅や赤坂迎賓館など、深谷で生産されたレンガを使用する建物を、現在も日本の各地で見ることができます。